旅する弥勒 十選 ▷4

民族学者　立川　武蔵

龍華を持つ弥勒

菩薩はしばしば自分に特有の花を持つ。例えば、観音は蓮の花を、文殊は睡蓮を手にする。

弥勒の花は龍華である。この龍華樹はオトギリソウ科のセイロンテツボクあるいはテリハボクとされ、東ベンガルの山地、東ヒマラヤ地方など に生える。高さ20㍍になる常緑樹で、サザンカに似た花は白い。この樹は薬用ともなる。

弥勒は龍華樹の下で悟りを開き、説法もこの樹の下で行われるという。弥勒にとってこの樹は、釈迦にとっての菩提樹なのである。

写真の絵は、11世紀チベット仏教復興の拠点となった西北インド、ラダック地方に残るアルチ僧院の壁画である。この弥勒の上部左手には、龍華とその葉が見られる。蓮や睡蓮とは形がかなり異なっているのでわかる。同じく降ろした左手には壺が見られる。

弥勒崇拝は、インドやネパール、アフガニスタン、チベット、中央アジア、モンゴル、中国、朝鮮半島、そして日本に伝えられた。ジャワ島のボロブドゥール遺跡の千数百に及ぶパネルにも、最も重要な菩薩として登場する。今日のタイでも弥勒崇拝が見られる。

仏教の伝播した地域のほとんどすべての地で信仰されており、龍華を手に持つ弥勒の像も広範囲で存在が確認されている。（11世紀、高さ約50㌢、インド、アルチ僧院新堂北壁）

文化往来

アイヌ民族博物館、口承資料のデータベース

アイヌ語はユネスコが認定する「日本における危機言語・方言」のうち、「絶滅」一歩手前の「極めて深刻」に分類される。その継承や保存に役立てようと、アイヌ民族博物館（北海道白老町）が道内各地の古老から聞き取った伝承や物語をデータベースとしてまとめ、ホームページ上で公開した。

公開したのは「アイヌと自然デジタル図鑑」。同館が1980年代を中心に実施した大規模な調査の際、収集した自然や暮らしに関わる音声データ660時間分を活用した。例えば「熊」という言葉を入力すると、「カムイ（神）」などと紹介され、関連する伝承や民話が一覧で表示される。生活の様子を理解しやすいよう写真も添えた。

3千に及ぶアイヌ語の検索ができる「辞典」の機能も備えている。言語学者の知里真志保がまとめた「分類アイヌ語辞典　植物編・動物編」を基に、方言を補い表記も全面的に見直している。

伝承や物語のほとんどは文字によるあらすじの紹介だが、6月からは一部の音声も聞くことができるようにした。祈りの言葉や歌も今後、日本語の対訳を付けるなどし公開を進める予定だ。同館学芸員の安田益穂氏は「アイヌ民族と関係がないと思っている人も関心を持ってほしい」と話している。

文化

崩れぬ石 熱意積み上げ

◇バランスアートの「積み石」、日本風の室内作品を追求◇

石花　ちとく

写真を見てほしい。石が微妙なバランスで積んである。接着剤を使ったり、後ろで支えたりしているわけではない。欧米では「ロックバランシング」と呼ばれ、私は日本風に「石花」と呼んでいる、石のバランスアートだ。私はその作家であり、愛好家を増やす活動にも取り組んでいる。

本当にこんなことが可能なのかと思う人もいるだろう。上手下手はあるが、実は誰にでもできる。コツを教えると、初心者でも3つ4つと石を積んでいける。

□○□

きっかけは近所の公園

立体物を立てるためには、支える点が3つは必要だ。石と石が1点で接しているように見えても、接触面を顕微鏡で見られれば、石の凹凸によってそこには3つの支持点があるのだろう。摩擦学のような話はわからないが、私はそんなふうに考えている。

始めたのは今から7年ほど前のことだ。子供を連れて近所の公園に遊びにいった。子供は友達と遊ぶので、その間、私はすることがない。ふと足元を見ると石があった。それを弄び、立ててみた。すると思いがけない姿勢で立った。脳内麻薬がドバドバ出るような快感があった。

室内で鑑賞できる作品が多い

次に公園に行ったとき、今度は2つの石を積んでみた。小さい石の上に大きい石を積めるかやってみると、簡単ではないができることがわかった。これは面白いと、石探しを始めた。街中にはなかなかいい石はないが、積みたくなるような石を見つけると拾って帰った。

やがて自分が気ままにやっていた石積みが欧米ではロックバランシングと呼ばれ、愛好者が多いことを知った。米国にはビル・ダン氏という巨匠がいる。ネット上に公開した作品を彼に見てもらった。すると「ネットには愛好家のコミュニティーがあるから君も見に来い」と誘われた。見てみると世界には度肝を抜くような作品を作る作家がいくらでもいることを知り、大いに発奮した。

□○□

盆栽や生け花のように

海外では大自然をバックにした屋外作品が多い。ロックバランシングは背景も含め、どういうイメージを作るかが重要だ。だが日本人の私が彼らのように雄大さを追求しても、かなわないだろう。そこで考えたのが、盆栽や生け花のように室内で作品を見せることだった。床の間などに置く、美意識を研ぎ澄ました作品を作れば、外国人も驚くはずだ、と。

石はただ積めばよいというものではない。どう積むかが大切だ。まず平積みでは魅力がない。石はなるべく立てたい。そして構造体が逆三角形になるように積んでいくほうがいい。塔のように垂直に積むのは退屈だ。木が横へ横へと枝を伸ばしていくようなイメージが展開できれば美しい。

「崩れそう」と思っても、バランスをとれる点を探り続ける。その点では粘り強さが求められるだろう。つい安全な方に行きたくなるが、それでは見た人がはっとするような石花は作れない。前向きな気分のときには大胆な作品が生まれるし、そうでないときには石が萎縮する。作品にその人の心の状態が表れるのが面白い。

□○□

石同士の相性が決め手

石の選び方も作品の質を大きく左右する。石には同じものは二つとなく、それぞれが固有の表情を持っている。形、色、大きさなど、違う種類を組み合わせるとニュアンスが生まれる。だが難しいのは石同士の相性だ。この2つを積みたいのに、どうしても載ってくれないというときがある。それは諦めるしかない。そんなままならなさも、ロックバランシングの面白さなのだ。

私の場合、ひとつの作品を作るのにかかる時間は30分くらいだろうか。会社員なので、平日は夜、家族が寝静まった時間に制作している。ただ、夜中にひとり息を詰めて石を積んでいると、さすがに気分が鬱々としてくるので、週末は河原に出かけて青空の下で健康的に楽しんでいる。何といっても、屋外なら大きい石を積み上げていく楽しみがある。

仲間も増えてきた。「石花道場」と称した集いを東京・阿佐ヶ谷のカフェで開いているほか、声がかかればワークショップにも出かけていく。みんなが思い思いに作品を作ればいい。たくさん積んだ人が偉いわけではないし、そもそも優劣をつけるようなものではない。お互いの個性を認め合い、努力をたたえ合う。そう、石積みとは大人の遊びなのだ。（いしはな・ちとく＝会社員）

挑戦

銀幕デビュー後、出演した映画は158本。最後の作品は2011年の「デンデラ」。今村昌平監督の「楢山節考」の売春婦という設定だった。

それまで数々のドラマや舞台で共演してきた「信頼できる友人」である。近藤さんは台本に目を通すためにわざわざ私の自宅までやって来て、こんな助言をしてくれた。

「最後に背中を押してくれたのが近藤正臣さんだった。」

（撮影はつらい。だがこの美しい雪景色が私たちの映画作りを助けてくれるはず）

自分にこう言い聞かせた。1カ月半。途中、私は氷で足を滑らせて右膝を強打し、腫れた膝から水を抜かなければならないまどのけが を負っ

今月2日で75歳を迎えた。私には夢がある――。80歳になったら高齢の姉妹が主役の映画「八月の鯨」に出てみたい。これは87年公開の米国映画。大女優のリリア

交遊抄

中身が大事

佐藤　健裕

「英語はうまい下手ではない。話す中身が大事なんです」。当時、モルガン・スタンレー証券のチーフエコノミスト、ロバート・フェルドマン氏からかけられた言葉に、後々随分と勇気づけられた。

出会いは1999年春。自分が本当にやりたい仕事を考えていた頃、フェルドマン氏が日本人のエコノミストを探していると知り、恐る恐る面接を受けた。

相手は当時既に著名な銀の審議委員就任の話を頂いた時、真っ先に相談すると「マーケットエコノミストとして最高の栄誉です」の言葉だ。

2012年に日本人のエコノミストを探しているようだ。

入社後に担当したのはマクロ経済分析と日銀ウオッチ。中身についてはほぼ自由にやらせてもらえた。時には上司のフェルドマン氏の見解とは正反対のリポートを出したこともある。投資家は「フェルドマンvs佐藤」の議論を面白がっていたようだ。

2012年に日本人のエコノミストとして最高の栄誉です

迷いの旅籠（59）

宮部みゆき　北村さゆり 画

一日、一日と立春が近づいてくる。離れ家の作業にも拍車がかかる。

あれきり、おたまは離れ家にやって来ないばかりか、小作人長屋でも一平とおつぎにまといつかないようになった。一平から話を聞いたおたまのおっかちゃんに、だいぶ叱られたらしい。毎日離れ家に通って行く兄妹を、ちょっと離れたところから恨めしそうに見ている様は、

「おたまの方がお化けみてぇだな」

そう言って、久しぶりに一平が愉快そうに笑ったのが、おつぎは嬉しかった。

立春まであと三日というところで、初めて、すっかり色付けまで終わった絵が貼り出された。まだ仮留めだが、絵は本物だから、息をひそめて丁寧に扱わねばならない。

「わぁ～」

あんまりきれいなので、おつぎはくらくらした。

「先生、きれいだね！」

「そうか、おつぎも気に入ってくれたかい」

先生は、「秋」の絵の一枚を指さした。

「ここに、木の実採りをしている乙女が描いてあるだろう。小さいから顔までは似せられなかったが、これはおまえだよ」

そういえば、「しばらくそのまま！」のときのおつぎと同じ格好をしている。

「春から冬まで、描いてある人の数を数えてごらん。小森村の人数と合っているから」

長木村と余野村は、それぞれのしるしである半纏を描くことで、絵のなかに入れ込んであるという。なるほど、「冬」の絵でお地蔵さんにかけて

みずほ銀行
One MIZUHO
ィーン支店 本日開設
リアの首都ウィーン。
中東欧の中心的都市に、本日〈みずほ〉は新たな拠点を開設します。
開を、お客さまの近くで、力強くサポートしていきます。